

須弥山石の復元

飛鳥資料館

斉明紀に度々見える須弥山と思われる石造物が、飛鳥石神から堀出されたのは、明治36年のことである。この石は当館の開館以来、飛鳥を代表する遺物として、飛鳥史跡めぐりの人々の関心を集めている。発見以来、重田定一、石田茂作らによって、斉明紀の饗宴場の装飾物として紹介された。3段積みのうち、下段と中段との表面の文様、注・排水孔の接合部分が連続していないところから、この間に入る石が失われていると指摘されてきた。当館は昨年度に復原した酒船石と共に、須弥山石を復原し、野外展示の充実を計画していたが、この度、石橋信夫氏の協力によって実現した。

現状の須弥山石は黒色砂岩を捕獲した角尖石花崗岩を上中下の3段積みになっている。下段の波文の内側は幅10cmの縁をもつ桶状をしており、内面の底に四方に向け径2cmの円孔を開けている。この孔は石の表面では径5mmの小孔となり、ここから外へ放水する。表面には水のたれしみが黒褐色になっていて、噴水であったことを示している。下段の石の底に対角線上に径2cmの孔を上向に貫通している。木樋のような接合仕口があり、ここから水槽へ注入孔である。もう一つはオーバーフロー用の排水孔である。排水孔の通過する表側に幅5cm、厚さ3mmの範囲に刃物で傷をつけたような痕跡がある。これまで波文加工時の傷跡かと思っていたが、奥行は7cmあって、排水孔を横切っていることが判った。つまり、この隙間に薄板を差し込めば導水を遮断する。これを堰止めると水槽内の気圧が高くなり噴水の防水力が大きくなる。まさに飛鳥時代の先端技術が凝縮していたことが判る。中段の石は山並を表現し、注排水孔は、ここまで上っていない。上段の石は蓋の役を果たすが、表面には頂部中心から八方に刻みがある。

製作は同質の石材を捜すことに最も苦心した。数ヶ月がかりで高取山支脈で製作条件を満たす花崗岩に出逢えた。作業は現存する3個の製作と、新しく加える1個の復原であった。原形のあるものはコピーにありがちな弱々しい線をさけ、力強い彫り方を強調した。ノミ仕口も原形の加工痕を忠実にまねた。新たに製作する石は、上、中段と接合するよう形・文様とも連続させた。山並の文様は山頂部を深く、山裾を浅くした。



復元須弥山石

展示は、前庭のほぼ中央に置いた。水位の落差を使って導入するため、水源はポンプで吸い上げた水を、注水口から2mの高さに水槽を設けた。須弥山石の出土した石神遺跡は玉石を敷きつめていた。こうした環境をつくるため、一辺10m四方に人頭大の河原石を敷きつめ、その中央に須弥山石を設置した。斉明紀の宴の跡の効果を期待したためである。（猪熊兼勝）